

心中あれこれ

大津 隆文

最近家の周りで猫の声をよく耳にするようになった。春の風物詩、猫の発情期が始まったのであろうか。俳句の世界では洒落て「猫の恋」と呼び人気ある季語だ。自分も何か一句と浮かんだのが次の駄句。

近頃は聞かぬ心中猫の恋

どんなに熱烈な鳴き声で人を悩ませて猫の心中は聞いたことがない。心中が起るのは人の世だけ、その心中も近頃は余り耳にすることがなくなった。

今は昔の昭和三十二年、天城山心中という世間の耳目を集中させた事件があった。

「天国に結ぶ恋」と大きく報じられ、多くの人が二人の死に涙した。

歌舞伎の世界に「曾根崎心中」や「心中天網島」といった名作があるように、古来男女の恋と浮世のしがらみの葛藤は悲劇の原因であり、人々の関心の的でもあった。

こうした心中事件を余り耳にしなくなったのは、恋人同士にとって親の反対、家柄の違い、不治の病といった障害が少なくなったためであれば、喜ぶべき現象と思う。それとも今の若者はより合理的、伶俐になったためであろうか。

なお心中には二人合意の自死のほか、無理心中と呼ばれるタイプもある。これは殺人であり、許されるものではないが、今も時々耳にする。恋は片思いが多いのは昔からの現実である。人を殺し自分も死ぬ覚悟があれば、どんな激情、苦悶も乗り越えていけそうに思うが、そうとはいかないのが恋だろうか。

さらに多いのが親子心中、一家心中と呼ばれるタイプである。これはなかなか減っていないようだ。我が子を残しては逝けないという心情は分かるが、将来ある子供の命を奪うというのは本当に悲劇だ。背景は、経済的な行き詰まり、親の孤立感、夫婦、親子の対立、病苦等様々である。典型的には若い母親の育児の苦悩をよく耳にするが、最近は介護とくに老々介護の絶望感というの目につき、他人事ではない。

社会的な支援の手が届けば、助けられることも多そうだ。国際比較しても日本はこのタイプの自殺が多いようで、何とか減らしてほしい。